

反障害通信

19. 8. 18

82号

フェミニズムと「障害者運動」の「不幸な対立」？

——「産む—産まないは女が決める」というスローガンを巡って——

そもそも「産む—産まないは女が決める」というスローガンは、女性差別に対する怒りの表現として、リブ(女性解放運動)の中で突き出されたスローガンで、その抑圧・差別に対する怒りのわかりやすい表現としてあったのです。ですが、親の「障害児・者」殺しの事件が起きる中で、「障害者」の親に対する告発の活動がおき、かつ優生保護法の改定の動きの中で、この「産む—産まないは女が決める」というスローガンは、「障害者」を中絶する「権利」につながるのではないかという批判が「障害者」サイドからありました。優生保護法に対する反対運動が「障害者」団体からは、そもそも優生保護法自体が「障害者」の中絶を認める条項があり、その撤廃を求め、女性団体の方は、経済的条項をなくし、中絶を非合法化することでの、闇中絶の中で命を落とす、女性が望まない出産の中で何が起きるのかということなどの議論が進む中で、「障害児」を産む権利という問題も含んで、「産む—産まない」ということ自体への国家の介入を許さないというところでの連帯があったのだと言います。

この対立は、一応、反優生運動の連帯の中で、子どもを何人産むかとか、子どもを産む—産まないという選択自身は、女性が主導する、女性の決定を尊重することで、そのことに関して女性に押しつけることではないけれど、「障害」の有無など、子どもの「属性」で選択的中絶をすることは許されない」として、しかも産む—産まないという選択ということ自身が、関係性の中で選択を強いられるということがあり、「(子どもを産みたい(作りたい)ひとに)誰もが安心して産み—育てられる環境を」というスローガンが出てきました。それで、この問題に決着が着いたことになっているようなのですが、なかなかすっきりしたものにはなっていないようです。

先に書いたように、親の「障害者」殺しするとき、それに対して減刑運動が起きることに対して、「わたしたちは殺されてもいい存在なのか」というところで、「厳正な裁判を」という突き出しをした運動が起きました。もちろん、親が「障害者」殺しに追い込まれていくことを十分に知った上で、それでも、それを認めてしまうと自分たちが自分たちの仲間が殺されていくという中で起きた運動です。「厳正な裁判を」というスローガンは「障害の社会モデル」が出て来ている今日的には、それを援用して「犯罪の社会モデル」として、「社会が「障害児」を殺したのだ」と批判していくことなのだとも言えます。その同じ構図が「産む—産まないはわたしが決める」というスローガンにもあるのです。

さて、「障害者運動」にはかなり広がっているスローガンがあります。それは「わたしたち抜きでわたしたちのことを決めるな」ということです。ちょっとインパクトが弱いのです。当事者主体の突き出しが弱くなっています。それをもっとインパクトをもたせると「わ

たしたちのことはわたしたちが決める」としたらどうでしょう？ これはこの「産む—産まないは女が決める」というスローガンと通じる事があります。

ですが、たぶん、「障害者運動」の方針として、そのようなところには落ち着きません。なぜかという、介助の態勢をどう作って行くのかというところで、制度を作って行く、社会的合意を作って行く必要があるからです。

さて、このあたりを考えていくと、リブの突き出した「産む—産まないはわたしが決める」という「自己決定権」や「選択権」の話になっていくと、現在の医学やバイオテクノロジーでの新しい技術の開発の中で、危うさを感じてしまいます。かつて、S. ファイアストーンが『性の弁証法—女性解放革命の場合』評論社 1972 の中で、女性差別があるのは、女性が子どもを産む性であるからで、科学技術の「発達」の中で、(当時 SF 的に語られていた)「試験管ペビー」的なことが可能になったら、女性は解放されるということを書いていました。その当時から批判されていたように「社会的な関係を自然的な関係と取り違える」という物象化という問題なのですが、それでも、人工授精ということは現実的になってきていて、「不妊治療」という名目でいろいろなことが進み、デザイン・ベビーというはなしさえ出てきています。それらのことは遺伝子操作というところの研究にも及んでいます。キリスト者だったら、神の領域までひとが踏み込んでいると批判することですが、無神論者のわたしは、自然の征服ということで、科学がやってきたことが何をもたらして来たのか、科学批判がさまざまな分野でなされてきたことで、「遺伝子操作は原子炉溶融より恐ろしい」(メイワン ホー『遺伝子を操作する—ばら色の約束が悪夢に変わるとき』三交社 2000)とか、ひとは「自然に適う」生き方しかできない(反原発の論陣を張った故高木仁三郎さんの提起)、そうでないならひとという種のそして地球の自滅への途を進むであろうという提起を想起せざるをえません。

さて、スローガンの話に戻ります。これは、まさに自己決定ということなのですが、「自己決定(権)のまやかし」ということが多くのひとから語られています。生命倫理ということ哲学的なところからとらえ返している小松美彦さんのまさにズバリタイトルにしたような本も出ています(『自己決定権は幻想である』洋泉社 2004)。そもそも現在社会の新自由主義的グローバリゼーションの時代のキーワードは「自己責任」です。「自己決定」の幻想の上にたった、「自己責任」なのです。そもそも「自己とはなにか」という問題があるのです。近代的個我の論理にたった、「わたしが決める」と言っても、実際その「わたし」はどのように形成(構築)されてきたのか、いるのかという問題があります。

このスローガンは、そもそも、様々な、産む—産まないという問題での抑圧の歴史に対する反発から出てきていて、障害問題でいえば、「障害は個性である」という個性論がもった過渡的な意義と同じ内容をもっているのだとも言い得ます。

「自分は選択したい、ちゃんと選択できるのだ」という自覚した(錯覚した?)女性のスローガンです。それでは、現実の差別の中で強いられている女性を押さえた運動にはなりません。だから、「安心して子どもを産めて、育てられる社会を」というスローガンが出てきているのだと思います。「対立」しているかのような構図は、そもそも性差別と障害差別の問題がこの社会の「差別の構造」ということで通底している問題なのです。

さて、いろいろ出生前診断の技術が出てきているのですが、「障害児」が生まれると分かると、かなりの確率で中絶する状況となっています。そのような選択をすることもなく、もしくは選択自体を拒み診断を受けないで、実際に「障害児」を産んだ親たちの語りが、この「対立の問題」の方向性を示してくれています。「不幸な子ども」を産んだと責められるのですが、子育ての中で、逆に「障害児」を産んだからこそ、つかめたことがある、そして幸せさえ感じるという語りも出ています。そして、「不幸」ととらえられること自体が、社会的関係性の中から出てきているという提言も出ています。

今の日本の「障害児教育」は、原則分離の教育体制になっているのですが、そもそも教育とは何かという問題があります。山田洋次監督の夜間中学を描いた『学校』という映画で、教員の「学校は何を学ぶところ」ということに対して、生徒のひとりが「幸せって何かを学ぶところ」と応える感動的なシーンがありました。現在の教育は、社会に出ていかに多くの労働賃金をもらえるかというところで競争していく差別選別教育で、その中でいじめや不登校の問題も起きています。いろいろ詰め込み教育や果てや日の丸・君が代の強制や愛国心の強制までやってきています。差別の反作用としてのまさに社会の歪みを反映していると感じられる「犯罪」といわれていることも、次々に起きています。高齢者だけでなく、壮年のときから、「ぽっくり死にたい」という言辭が広がっています。そもそも、「ひとの幸せは何か」と考えるなら、「障害者の生きやすい社会はみんながいきやすい社会である」という「障害者運動」のスローガンに照らして、「障害児」を大切な存在として、共生共育を進めることだと思うのです。

この対立の構図が、差別の構造をきちんととらえ返していない中で起きている構築された対立の図式であるという思いがあり、ずっと以前から、同じようなタイトルで文を書こうとしていました。これは実は2019年8月11日の「緊急シンポジウム 新型出生前診断はだれのため」というタイトルの集会に参加して、改めて書き出したのですが、以前書いた、箇条書きのメモを式に書いたことも若干校正して次に貼り付けて置きます。

フェミニズムと「障害者運動」の「不幸な対立」を超えること

「産む・産まないは女がきめる」というスローガンで対立、それは優生保護法反対を巡る共闘の中で、選択的出産は許されないという突き出しで一応の和解というか決着がついたようです。けれど今ひとつフェミニスト総体としては納得していない節があります。問題の整理を計ります。

- ① フェミニズムの問題も障害問題も差別の構造というところから出てきているということをとらえると、差別構造そのものを撃つところでの連帯の問題になっていくはずですが。性差別がどのようなところから来ているのかということを押さえていない論攷ではないかと思えます。
- ② そもそもフェミニズムが人種問題、階層の問題、エリート主義—近代合理主義で批判されてきた一枚岩ではないことがあります。またその差別が収束していくこととして、能力を巡る差別の問題があります。差別されるのはいやだ、差別する側になりたいということではないはずで、そのことを押さえると、「障害者」差別と共に闘うということに

なるはずです。

- ③ バイオテクノロジーの「発達」の中で、選択ということを認めれば、多くの女性にとって、産むことを許されないということになりかねないことで、社会の崩壊をもたらします。またそのような生物学的多様性をなくすこと自体が、生物学的にも種の絶命の危機をもたらすとも言われています。
- ④ そもそも「産まない」「産めない」女性に対する差別になっています。
- ⑤ 女を産むか男を産むかというところで、選択する一できるとなるとそこに起きる問題もあります。かつては「跡継ぎ」の男の子を産むということで抑圧されてきた歴史があります。逆に、今、「女の子がいい」というのは、性差別的なところに乗って家事を担うのが女ということの性役割分業の固定化になりかねないのです。選択自体が性差別を助長する一固定化するという問題もあります。

(み)

(「反差別原論」への断章) (11) としても)

HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

◆「反障害通信 82 号」アップ(19/8/18)

◆ホームページをリニューアルしました。協同作業を追求してきましたのですが、うまく進められず、別にあきらめた訳ではないのですが、論的な深化にウエイトをおきます。

◆トップページの I に「ホームページの見方・検索の仕方」という項目を作り、アクセスしやすいようにしました。まだ、工事中です。「アーカイブ」を大幅更新しようとしています。もう少し時間がかかります。サブホームページ「反差別資料室 C」の文献表をアクセスしやすくし、「反障害-反差別研究会」のメインホームページとリンクできるようにしています。だいたいの作業は終わったのですが「アーカイブ」がまだです。新しく購入した本、読書した本は随時追加していきます。

読書メモ

歴史研究、現時点ではロシア革命史関係の本。今回はトロツキー関係本。予告していたように複線読書はできず、トロツキー関係本に集中しました。これが次回まで続きます。その後は、他の革命史関係本。複線学習にも戻る予定です。

たわしの読書メモ・・ブログ 502

・トロツキー／藤井一行訳『ロシア革命史<1>～<5>』岩波書店(岩波文庫) 2000・2001

この本は以前角川文庫山西訳で途中まで(最終章かその一歩前まで)読んでいて紛失して、読了し損ねていた著です。山西さんの訳の問題点を押さえて、ロシア語から訳し岩波文庫から出た本です。

ロシアの革命はねじ曲げられて、スターリンの一国社会主義路線で、管理抑圧支配体制

と大量粛清を生み出しました。で、管理抑圧支配体制の中で70年も続いたのですが、未だに古い観念にとらわれている以外のひとのロシア革命の評価は、「社会主義」に踏み込む以前の、プロ独段階から「国家(独占)資本主義」に転化し、「社会帝国主義」とでも言うべき覇権国家になったということに収束しているようです。

1990年代を前後してロシアのそして東欧の「社会主義国家の崩壊」ということで、それがマルクス以来の共産主義革命論の破綻からマルクス葬送という流れを生み出ししています。そして、リベラルな学者さえも「資本主義はなくなる」「市場経済はなくなる」という主張をなしています。で、そこでは、マルクスが押さえた資本主義社会の分析をつかえなくなります。そもそも学的な深化がなしえなくなり、近代的合理主義者という立場での「民主主義的反差別論」か、こっそりマルクスをとりいれるというごまかしになっていきます。前者はそもそも差別がどこから出てきているのかという分析なき反差別論で、有効性をもちえません。

2015年の国会前の戦争法(安全保障関連法案)反対の運動は若者の新しい形の運動を作り出し、大きな直接民主主義の運動のうねりを生み出しました。ただ、かれらは結局「生活保守」とか言いだし、死に瀕している間接民主主義へ投げ出すことで、運動を収束させてしまいました。その主催者のひとたちに責任があったわけではありません。長く間接民主主義の流れは、「社会は変わらない」という大きな風潮を生み出していたのです。そこで、「社会は変わりうるのだ」というところでの大きなうねりをうみだすところまで進みえなかったのです。それは、そもそも、社会変革運動の主流であったマルクスの流れの運動の混乱の総括がなされていなかったからです。その総括は、少なくともロシア革命のとらえ返しの作業までさかのぼらねばなりません。

その始まりとしての、わたしの歴史研究で、ロシア革命の総括のとらえ返しです。

すでに、レーニンの著作を読み始めていました。その中で、レーニンの著作や解説は、ロシアのスターリン支配の中での隠蔽や歪曲がおこっているのではないかという思いもあったのですが、それでもその中からレーニンはあるまで、ロシアの革命はロシア一国ではなしえないというテーゼを持ち続けていたということを読み取っていました。トロツキーのこの著や訳者の解説でこのことをはっきりととらえ返せました。レーニンは4月になって、初めてブルジョア民主主義革命を経ないでもプロレタリア独裁は可能だと突き出しました。そのことはトロツキーの永続革命論とリンクしたのです。それ以後の、レーニンとトロツキーはシンクロしていたのです。ただ、ふたりの違いはソヴィエトの位置づけの違いと、蜂起を巡る時期のズレです。後者は、レーニンが地下潜行したことによる民衆の意識をつかめにくくなっていたことで、レーニン自体が誤りを認めているようです。実は、この後者も、前者のソヴィエトの位置づけの違いがあるようなのです。トロツキーは、ソヴィエトに依拠する、というところが強く、レーニンにはむしろボリシェヴィキ単独のプロレタリア独裁的な傾向が強く、80%を占める農民の支持なしには革命をなしえない、持続できないというところで、ソヴィエトを利用するというところでソヴィエトを通してということをやっていたに過ぎません。トロツキーはむしろ武力衝突をできるだけ回避するという意味も込めて、ソヴィエトに依拠するというところで、後者のソヴィエトの大会に合わせて、蜂起を進めるということリーダーシップをとりました。レーニンは無血革命で

トロツキーの方針の正しさを、地下に潜っていたところで状況をつかみにくくなっていたということも含めて自己批判し、事後承認しています。

さて、ソヴィエトの位置づけは、農民のとらえ方の問題からも来ています。

ロシアの農民は層として土地所有にとられる小ブルジョアジーである、というところまで遅れた資本主義を発展させるために工業化するという方針の下で、農民の革命運動の中での位置づけを低くとらえています。

資本主義の発達には確かに、農林水産→工業→金融・サービスという方向で「発展」していったのですが、それは資本主義の論理そのもので、「社会主義」の途は必ずしもそういう方向へ進む必要はなかったとも言えます。資本主義的な発展の途をたどろうとしたが故に、中央地方という格差や抑圧の構造を生み出し、農民への収奪ということを生み出し、そこに農や牧畜で生計を立てるひとたちが大ロシア民族ではなく、「少数民族」であったというところでの民族問題もでてきます。民族問題に関しては後述します。10月革命時に、ロシアの農民は、土地の地主から取り上げ、農具などを取り上げ、また報復的な暴力的行為にも及びました。労働者と同等の、むしろ労働者よりもラジカルな行動をとったという面もあったのです。それは、農奴制やそこから離脱する過程の農村共同体—ミールの歴史があったから、プチブルというよりも、ミールの共同性に根ざしたラジカル性があったのではないかとわたしは思うのですが、そのあたりのとらえ方が出てきません。それは、むしろマルクスが「資本論草稿」の中で書き、ロシアの革命家、ザースリチへの手紙で書いていたことで、今日のマルクスの反差別論からする再評価として出てきていることです。このあたりをボリシェヴィキのひとたちが押さえていたら、ロシアの農民のとらえ方がもう少し違っていて、そのラジカル性を引き出しつつ、農民層の支持も獲得でき、社会革命党からヘゲモニーの移行もできていたのかも知れません。

さて、民族問題の続きです。レーニンには民族問題では民族自決権や民族自治権で、ローザ・ルクセンブルグとの論争で正しい方針示したとされるのですが、自治国家論的なところや議席数を確保するという点では、自決権にはなりません。そもそも、差別を階級支配の道具論と置くこと自体が、反差別の運動の社会変革の(潜在的なこともある)可能性をとらえない政治利用主義に陥ります。少数民族は多数の民族では票決的には従属させられます。まして全体主義的な体制が作られたときには、反差別は機能しません。わたしは民族問題に関わる拒否権的なところを持ち出すしかないと思います。ちょっと脱線しますが、民族問題そのものではないのですが、沖縄の基地問題での沖縄の民意が活かされない問題でも、地域にいろいろなことを押しつけていく政治にもこの「拒否権」の思想を取り入れるべきです。

さて、もうひとつの問題、武装蜂起とその評価の問題です。レーニンはソヴィエト大会よりずっと以前に武装蜂起的に権力奪取しておくべきだとして、トロツキーの批判もしていました。結局ソヴィエト大会直前に労働者の民兵軍—赤衛軍を使って拠点の武力占拠を行いました。スターリンはその情報をトロツキーがもらして危険に陥らせたとは批判しているのですが、むしろソヴィエトの中での取り込める分を取り込むというところでは、そして時期的に適切であったところで、無血革命をもたらしました。また、民衆の頭越しの運動をしないという意味での民主主義的なところで、まさにフィットした状況分析と正しい方

針でした。

この革命は、資本主義の遅れてきたロシアで、しかも専制的ツァーリズムの弾圧とナロードニキから始まるテロの歴史の中で、そして数々の反革命的弾圧やクーデターの動きの中で、軍事的行動に出るということはむしろ必然的なこととしてあったと思います。むしろそのことによって「無血革命」をなしえたとも言い得ます。余談的になりますが、当然出てくる問題として、今日的にどうなるのかという問題。右翼やファシストが暴力を躊躇はしないというところで、その攻撃からの防御をつねに考えねばならないということで、また軍隊のクーデターの問題で、軍事の問題は考えておかねばならないということです。そのことの論考はまた別稿で論じます。

スターリン主義の総括がなされぬまま、国家主義にとりこまれる「左翼」は、スターリン主義批判の流れから出てきた左翼をトロツキスト規定するのですが、確かに世界革命を唱えるという集団をトロツキストとするのなら、その規定は当てはまるのかもしれませんが。ただし、レーニンも世界革命ということを捨てたわけではないので、むしろ「レーニン主義者」として批判することです。ですが、そもそもスターリンはレーニンの正当な継承者と自認しているのですから、そんな批判はできません。そもそもスターリンとレーニンの間に大きな断絶があり、スターリンは大きくレーニンの思想をねじ曲げたのです。

もっとも、ネップとクロンシュタットの反乱への弾圧はレーニンの生きている時代に起きたこと、そしてクロンシュタットの反乱の弾圧はトロツキーが赤軍議長のときになされたこと、そしてクロンシュタットの反乱の鎮圧を「鉄の蜂起で掃き捨てた」とトロツキーが言っているらしいこと、10月革命へ向かう過程で、クロンシュタットに何度も出向きその革命性を引き出したトロツキーが、その革命性故に、政権への反乱を起こしたその反乱を弾圧する立場に立ったことを、世界革命—永続革命を唱えるトロツキーの思想性が問われるはずなのです。

この著を読んで、感じていることをかなり書き綴ってみました。ここで、この著に戻って、状況や民衆の意識をすどくとらえるトロツキーやレーニンの発言は、まさに革命家のアジテーションになっています。切り抜きメモを残そうとしていたのですが、かなりな分量になり、またトロツキー評価を総体的にしたところでの細かい注釈も必要になります。先を急ぎます。いくつか書きかけたのですが、カットします。

たわしの読書メモ・・ブログ 503

・トロツキー／藤井一行訳『裏切られた革命』岩波書店(岩波文庫) 1992

前の読書メモで、ロシア革命史の学習でこの著者の本『ロシア革命史』を読み、そこから波及して、トロツキーのこの本もその続きとしての内容があるので、読むことにしました。前の本は、「ロシア革命」を学習するために読んでいた本、この本はそこから波及して一冊くらいトロツキーを読んでおかななくてはと、しかもロシア革命をどうとらえるのかというところで読んでおかななくてはと、そのうち読もうくらいで買い求めていた本を続きとして読んでおこうと引き出したのです。

なぜ、今更ロシア革命史なのか、トロツキーなのかという話ですが、それは、社会変革

の運動を担ったひとたちの総括の原点がロシア革命とその総括にあるという思いから、レーニンの第一次学習をしてボリシェヴィキズムのとらえ返しをしようとしたのですが、なぜ、レーニンをスターリンが継いでしまったのかというところで、トロツキー派の党内闘争の敗北を押さえなければならないということと、トロツキーが社会民主党の最初の分裂のときに、レーニンの組織論—中央集権制を批判し、ボリシェヴィキではなく、メニシェヴィキの方に行ったということを押さえる必要を感じているからです。トロツキーはすぐにメニシェヴィキは離脱します。それはメニシェヴィキが祖国防衛というところに取り込まれていくということと、ブルジョア民主主義革命に収束させようとする民主主義派になっていくということでの批判です。

さて、そこでトロツキーの本を何冊か読んでおこうと思っています。現時点で押さえていることとして、1917年の二月革命の後、帰国したレーニンは四月テーゼを出します。古くからのボリシェヴィキだったひとたちには青天の霹靂のようなことでした。トロツキーは遅れて五月に帰国し、四月テーゼに賛同の意を表します。で、レーニンと歩調を合わせて動き始めます。トロツキーがメジライオンティを引き連れて、ボリシェヴィキに正式に合流したのは七月です。ロシア十月革命は、レーニンとトロツキーどちらがいなくてもなしえなかったという動きでした。二人の違いは、トロツキーがソヴェトをレーニンよりも重視したことにあります。レーニンはどちらかということ、プロレタリア独裁志向で、当時八割の農民とそれを背景にした軍の存在をとらえたところで、労農兵ソヴェトの独裁をとりあえず行うということではなかったと押さえていたとわたしは思います。さて、ここからプロレタリアートの独裁が党の独裁、そしてスターリンの独裁という事態にまで進み、トロツキーとレーニンはあくまで世界革命ということの必要性を押さえていたのですが、スターリンの一国社会主義路線に敗北していくことになります。そもそも、レーニンそして多分トロツキーも、新経済政策という形で、資本主義経済の取り入れを主導したか、賛成しています。そして1921年のクロンシュタットの反乱の鎮圧、当時トロツキーは赤軍の議長でした。すくなくとも容認か、引きずられています。そのあたりの総括をトロツキーはどうしているのかという問題があります。このあたりの矛盾がスターリン支配の根本にあるのではないかと思います。

さて、長すぎた前置きから、この本の内容に入ります。

この本原題は、「ソ連とはなにか、ソ連はどこへ行きつつあるか?」、それをフランス語訳で「裏切られた革命」という表題がつき、トロツキーもそれを受け入れ、その後自分でもこの本の紹介のときにこの「裏切られた革命」という名をつかっていたとのことですが、そもそも自分も主導した革命の敗北を「裏切られた」と受動的に語ってしまう問題があります。この本はロシア革命がどのような否定的状況になっていったのか、いるのかということ刻銘に書き、それなりに分析していますが、その元になっていることが何なのかの分析まで進んでいません。問題は、そもそもボリシェヴィキズムの核心の中央集権制自体をトロツキーが当初批判していたこと、そこからトロツキーがどう変節していったのかということ、この中央集権制自体が、ソヴェト独裁→プロレタリア独裁→共産党独裁→スターリン独裁まですすんでいったのではないかということ。また、そもそも、後れた資本主義において、プロレタリア革命はなしえないということ、レーニンが四月テ

一ゼで転換したのですが、そもそもそこで生産性の問題が繰り返し出てきて、ネップの導入に至るのですが、そのことがますますロシアの社会に矛盾を来します。トロツキーはスターリンだけに帰せる責任と、自分たちも関わったネップから帰せる問題の区別をきちんとしえていません。最も負として指摘されていること、ゲーペーウーによる摘発・支配でも、そもそもレーニンがチェカーとしてやっていたことで、この本の中でもトロツキーが、この本の中で「当時もしだれか、たとえば無意味で欺瞞的なケログ条約に加わるとか、コミンテルンの政策をおだやかなものにするとかによって、「民主主義的」な帝国主義の歓心を買うことをあえて提案する者がいたとすれば、レーニンは疑いなく、革新的な提案者を精神病院に入れるように提案したであろうし、それにたいしてよもや政治局の中で反対はでなかったであろう。」240P と書いています。まさにその後のスターリンがなしたことを想起させる内容です。そういう意味で、レーニンから帰せられる問題や自分自身の総括をネグレクトしているとは思えません。

レーニンやトロツキーと切断して、スターリン自身に帰せられるはっきりした誤りは、一国において社会主義建設は可能だとしたこと、そして「亀の歩み」論から、社会主義建設をなしえたとして、その後は冷戦構造の中で、ロシアの国益優先主義に陥り、「国際共産主義運動」においてコミンテルンを通じて数々の誤りを各国共産党に押しつけていったという歴史があります。

1980年代の後半から1990年代の始めにかけて、ソヴェト連邦は崩壊しました。それは結局一国社会主義建設路線の敗北として、ロシア革命自身が、強引に（強引すぎて）なした革命は破産するということを、党の独裁やゲーペーウー支配の中で言論の自由も奪い抑圧して70年も維持し、数々の矛盾を来したことの破産としてとらえられるのでしょうか？

これからの社会変革運動は、ロシア革命まで遡った総括とそれから各国・各地域での社会変革運動の敗北の総括をなしえないことには、繰り返し出てくる内容のない変革志向の継続性のない活動に陥っていきます。きちんとした総括がいまこそ必要になっています。

本の中に書き込みをしていたのですが、これもひとつ前の読書メモの文末に書いた内容で、これは切り抜きメモを作ること自体を止めました。

たわしの読書メモ・・・ブログ 504

・R.ダニエルズ／国際社会主義運動研究会訳『ロシア共産党党内闘争史』現代思潮社 1975

ロシア革命関係の基本的文献として押さえていて以前買っていたのですが、一回紛失しています。改めて買い求めて、ロシア革命史を学習するときに最終的に読もうと思っていました。やっとたどりつけました。今回の読書メモはこの著書の本の中から、そしてすでに読んだ本とリンクさせて、本を読みながら考えたことも含めたメモにします。かなり、わたしの考えも組み入れます。ただ、どこまでがこの本のことか、他の本の事か、どこからわたしの意見かをちゃんと書こうとするつもりです。

原題は「革命の良心——ソヴィエト・ロシアにおける共産主義的反対派」です。こちらの方が著者の思い入れを表しているのですが、邦訳の題の方がテーマが伝わり広く読まれ

ることになったと言い得るでしょう一訳の責任者がトロツキー派と一般的に評価されている対馬さんなので、著者もその流れの中にあるのでしょうか、トロツキー批判もきちんとしています。反対派、スターリン派のせめぎ合い(スターリンはつぎつぎに肅正していったので、今日のスターリン派は明日は反革命、反レーニン主義、反ボリシェヴィキとして排除されているので、スターリン派という概念自体があいまいになっていきます)、その中に描かれている人物像が浮かび上がっていきます。

この本を読んでいくと、レーニンとトロツキーとスターリンの関係がはっきりしてきます。まず、トロツキーは1903年の第二回ロシア社会民主労働者党の大会の分裂で、レーニンたちのボリシェヴィキの中央集権的組織論に反対してメニシェヴィキに与したということがあります。で、このあたり、ソヴィエトというところのイメージの違いが回ります。トロツキーの方がソヴィエトを尊重するということがありました。レーニンは、むしろというか結局、プロレタリアート独裁にもっていくまでにソヴィエトを使うという意識性しかなかったようです。トロツキーの永続革命論はレーニンの四月テーゼとシンクロしているようです。一方トロツキーはメジライオンツィというグループを形成しながら、四月以降ボリシェヴィキと歩調を合わせて動き始めます。七月末に合流し、十月革命の時は、地下に潜ったレーニンに代わって、まさに司令塔的な役割を果たします。トロツキーは四月以降、まさにレーニンに引き寄せられ、「弟子」ということばも発しながら、共鳴し、特に軍事的な司令塔になることによって、ますますレーニンの中央集権的なところからめとられていきます。それは労働運動の組織化というところでも軍隊的中央集権化というところにも表れています。レーニンは状況を的確につかみとろうとし、そこから新しい方針を提起していきます。その変換に旧ボリシェヴィキ・メンバーが付いて来にくい中で、トロツキーはだいたい共鳴していきます。ときにはソヴィエトの評価から蜂起の時期の設定の違い、ブレスト・リトフスク条約の締結を巡る衝突といろいろ衝突もありました。それは実はレーニンとトロツキーの明らかな違いとしてあったわけで、トロツキーがそれをきちんと自覚し、そこで批判も含めた動きをしていくことだったのですが、自分の出発点の中央集権批判をすててしまったからこそ、分派的なうごきさえできなくなっていたのです。スターリンはトロツキーのそのようなところを押さえ、突き崩しました。スターリンの陰謀的組織者としての突出やトロツキーのレーニンが批判した「権威主義」(わたしはそれを「自己顕示的運動」になっていることと押さえます)が、外敵との闘いにおいては状況をおさえる的確に方針だしていくことに秀でていたのに、「党内闘争」的には逡巡の繰り返しになっていたのです。レーニンはまさにリアリスト革命家として生き、道半ばにして病に倒れたのですが、トロツキーは文学者でもあり、革命家に徹しきれないで、そして党内闘争における権力闘争の状況判断を繰り返し間違えていきます。むしろ「権力闘争」という意識性自体が希薄だった、なかったのかもしれませんが。トロツキーはレーニン主義者になっていたからこそ、中央集権主義にとらわれ、分派の禁止の論理とかにとらわれ、スターリンの事務処理能力や陰謀的官僚的組織化というところでの書記局・組織局支配の中で、真綿で首を絞めるようにじわじわと排除の網の目を作り出していったのです。中央集権といっても、少なくともレーニンはいつも新しい見解を示し、少数派として周りのひとたちを説得していくしかなかったからこそ、集団指導的な議論を尊重していました。それはボ

リシェヴィキの伝統のようなこととして良い面も維持していたのをスターリンは中央集権的独裁体制で議論さえもさせない体制を築き上げていったのです。スターリンは、まさにレーニン主義を標榜したのですが、はっきりした違いがありました。それはレーニンは少なくとも死ぬまで、先発の資本主義における革命と連動する形でソヴィエトの革命の未来がありえるとしていたのですが、そして時には自国の利害で被害を被っても世界的に革命を進めるのだという革命的敗北主義の主張をもっていました。スターリンは一国でも可能だとして社会主義の「亀のあゆみ」をなしていこう言いつつ（これは今日スターリンがなしたことを見ていると、かれがやったのは権力闘争で、結局、革命の意志があったのかどうかまで問題になります）、ついには「社会主義国」をなしたとまで主張するに至ります。もうひとつの違いは、レーニンは革命に殉じるところで、官僚的なことをいかに排するかということがあったようなのですが、スターリンには自己顕示的なところの権力欲で動いていったということです。そして、レーニンには間違ったところには反省するところがあり、レーニンには自分とその信じる処に自信をもって突き進んだのですが、スターリンは紆余曲折し、結局自分がつぶした相手の主張をこっそりと自分の政策のように取り入れていったということもあり、自分の間違いを隠蔽や自分が潰す一潰したひとの評価を落とし込め、自分の無謬性を主張するために歴史の改ざんさえなしていったということがあります。ただ、レーニン主義者を標榜し、レーニン主義からの逸脱ということをもって他者を落とし込めるといふ手法を使っていました。確かに、レーニンの中央集権主義的なところや、目的のために突き進むというレーニン以上に目的のために手段を選ばないというところは継承していったようです。

レーニンは病に倒れたのですが、すでにレーニンの生前に直接世界革命へのリンクしていかないという状況がとらえられてきました。で、干渉戦争や内戦下の中で新経済政策—ネップという資本主義的なことをとりいれます。そして、もうひとつこの本には詳しく書かれていませんが、クロンシュタットの反乱の弾圧という問題があります。このとき、トロツキーは赤軍の議長でした。どうも直接に弾圧の指揮をしたのはジノヴィエフのようですが、トロツキーもレーニンも反対はしていないようです。インターネットで検索するとトロツキーの「鉄の箒で一掃した」とかいう発言の記録が残っているようです。これらの、永続革命論的なところから遊離することへの総括—評価はこの本の中ではできません。

さて、スターリンにはネップに対して国家資本主義という押さえはあるようです。そこから、党内闘争の中で出ていた富農の解体や重工業への転換というところへの5カ年計画という形で進めいくのですが、党支配の官僚主義的なところでの管理支配の強化の中でも生産性向上運動ということは労働者の搾取の強化ということになるのではと思います。それを著者はむしろ反対派の政策のとりいれによる「社会主義的な政策」へ進んだというように押さええているようなのですが、そもそもネップ自体も資本主義にかじをとったということで、ここからマルクスの唯物史観の考えでは、経済的なことが意識を規定するという意味で、経済は資本主義で政治文化で社会主義への道を進むということは破綻していきません。レーニンはまだ世界革命へのリンクということで、レーニンのなリアリズムでの一時的処置としてあったのでしょうが、それをスターリンはまさに国家資本主義ということにすぎないことを「社会主義」いいつのり、その一国社会主義の体制の伸張と冷戦構造の中

で、各国「共産党」とコミンテルンを形成するのですが、第三インターナショナル——コミンテルをロシアの利害に従属させる「国際共産主義的運動」の歪曲ということをしたと言わざるをえないような状況がとらえられます。

さて、話を「党内闘争史」に戻します。トロイカ(スターリン、ジノヴィエフ、カーメネフ)による左翼反対派の排除、そのトロイカの一翼ジノヴィエフらの排除、合同反対派の排除、右翼反対派の排除、そして大量粛清—処刑に至ります。一体どうしてそういうところまで行ったのかという問題があります。社会民主党の討論の歴史を見ると、むしろロシアの社会変革派の伝統として、討論の機会をきちんと確保し、説得するという伝統があったようなのです。そして、意見の相違で意見が通らないと判断したときは退席するという手段をとるということがありました。レーニンには、純化志向がありましたが、除名とかまではしないという伝統があったようです。陰謀的なところに陥っていく前のスターリンも「処分すると次から次に処分していかなくてはならなくなる」という自ら陥った疑心暗鬼的な処分と相手の殲滅のような構造におちいらぬという歯止めがありました。まさに他者を排除する者は、みずからが排除されるとの恐怖に陥り、疑心暗鬼の塊のようになっていったということのようです。そもそもスターリンは、最初レーニンのイエスマンだったのです。これは意見が一致していたという意味ではなく、彼の権力志向で強い者に従属し、それが自分が権力を握るようになるるとまさに自分に刃向かう、また何か力があると思うと、あらかじめ排除していく、排除というより抹殺として進めました。それはまさにロシアの恐怖政治をひいたイワン雷帝にもなぞらえられるのです。ひとを的確にとらえたレーニンは、ボリシェヴィキ内では、他者を説得して変えていける自信をもっていたのですが、最後にスターリンを書記長から下ろせという遺言を残しています。それをとらえられなかつた当時の政治局の状況の読めなさこそが、スターリンの独裁を許したとも言い得ます。後に反対派として動いていくひとたちは、まさにスターリンとの同盟から、順次反対派にされていく、時をつかめず。まさにスターリン独裁と大量の粛清を生み出しました。さて、歴史の話をするときに、どのような可能性があったのかという話、「たら・れば」の話にしても仕方がないのですが、レーニンが病気で死ななければとか、またトロツキーがレーニンの提起を受けて議長代理を引き受けて、スターリンの個人独裁の道を塞ぐ手法に進んでいけばという問題があります。ですが、そもそもトロツキーはオールドボリシェヴィキではなかったのです。むしろトロツキーは、中央集権主義批判としてソヴィエトにおいてボリシェヴィキと他の潮流の与することができるひとたちとで、ボリシェヴィキの独裁いう道を押さえ込み、もし独裁が必要ならば、ということですが、ソヴィエトでの独裁いう道を進むことではなかったかとも思います。

もうひとつの問題、そもそもマルクス思想の決定論と主意主義の問題があります。

後発の資本主義としてのロシア、しかもヨーロッパも覆う専制ロシアという状況下における革命として、マルクスの唯物史観からすると革命は先進国から起きることで、ロシアにおけるプロレタリア革命は不可能という定式がありました(最新のマルクス研究では、後期マルクスの新しい展開ということも出ています)。レーニンは『ロシアにおける資本主義の発達』という本でロシアでも資本主義はそれなりに発達している、特に先進資本主義がギルド的徒弟的労働や家内制手工業からマニファクチャ、機械制生産様式と発達していっ

たのに対して、それらを通り越して機械制大工場の生産としてそれなりに労働者層が形成されているとして押さえつつ、それでもブルジョア民主主義革命を経てから先進国革命に連動してプロレタリア革命という図式を描いていたのですが、四月テーゼで、ロシアにおいても労農ソヴィエト独裁という形で、革命は可能という突き出しをしました。このあたり、トロツキーの永続革命論とのシンクロもあったようなのです(永続革命論はこの本の中でも少し出てきますが、この本の後の連続学習で取り組む予定です)。で、唯物史観的なことに対してむしろ主意主義的に、意識的な働きかけの可能性ということを見たとも言い得ることで、しかし、結局、内戦や干渉戦争もあったところで、農というところでのつまづき、農業と工業との関係を押さえるところの失敗の問題もあったにせよ、結局は、ソヴィエト独裁から党の独裁、スターリンの個人的独裁、テクノラートの支配という形に収束し、チェーカーからゲーペーウーを使ったまさに鉄(スターリンは筆名で、「鋼鉄の人」という意味があるようです)の管理支配体制というところで、体制を維持しえに過ぎず、結局、この本が出されたときには、それがまだ続いていたのですが、結局プロレタリアート独裁から社会主義への移行をなしえず、ソ連邦は崩壊したのです。これをどうとらえるのか、結局、マルクスの唯物史観の定式に収まったとも言い得ることで、このあたりは、総括の核心なところで、スターリン主義の総括のみならず、レーニン主義ということの総括も必要になっていると、わたし自身のわずかなりともその作業に参入しようと、この読書もその一環です。読書作業をまとめる形で文を書きたいと思っています。

さて、わたしの反差別論の立場での関心事として、レーニンの民族問題とそこをリンクするスターリンの民族問題があります。レーニンは、スターリン批判にリンクすることとして「ロシア化したロシア人が真のロシア人よりもロシア人的方向に事態を誇張することは衆知のことである」144P(これは他のひとに向けた批判ですが、グルジア人であったスターリンにも当てはまります)ということを語り文も残しています。このあたり、わたしのマージナルパーソン研究ともリンクすることで、もう少し作業を進めてこれも文にします。わたしはそもそもレーニンが民族問題に関して、「差別とは階級支配の道具である」という定式自体が誤っているのではないかと思います。そもそも階級の問題も差別の問題だということを押さえ損なっている規定ですが、これだと、民族問題は階級闘争を進めるために解決しなければならないやっかいな問題だという認識の域を超え得なくなります。わたしは、むしろ差別に対する怒りから、その怒りが他の差別問題と結びつかないとナショナリズム的な間違った方向にいつてしまうことはあるにせよ、きちんと反差別の关系的に結びついたところで積極的にいかせることなのだと思います。一般に左翼総体においてレーニン主義にとらわれる中で、レーニンとローザ・ルクセンブルクの間で交わされた民族問題に関する論争で、レーニンは民族自決権ということでローザを論破したとなっているのですが、わたしは民族自決権ということを経済主義的に自治共和国の形成というかたちでの自決権では、問題は解決されないとも言い得るのではないかと考えています。この本の中でもスターリンの民族対応(ジョルジアを三つの小共和国へ統合する問題での対応 141P)で、レーニンとの亀裂が起きたという大きな問題としてあったのですが(レーニンが最初倒れ復帰したときにこの問題からスターリンを書記長から降ろす、最後の取り組みをしていました 141P-150P)、中央集権制という事の中で、自決権がどうなるのか、この本の中でも「民

族自決権とはフィクションである」ということが書かれています。実際、むしろスターリンが合同反対派のトロツキー、ジノヴィエフ、カーメネフがユダヤ人であるということでスターリン自身も「われわれが、トロツキー、ジノヴィエフ、カーメネフを闘うのは、彼らがユダヤ人だからではなく、彼らが日和見主義だからである。」245P どう見ても民族差別に反対するということだけでなく、暗に煽るということをしていますし、そして民衆、ボリシェヴィキの代議員、そして中央委員会、政治局も民族差別にとらえられていたことが肅正を許すことにつながったのだとも言い得ます（スターリンの差別性は民族問題に限られません。その当時に障害差別が対象化できなかったという時代制約性はあったにせよ、相手をおとしめるのに「障害者」に対する差別性を持ち出すその話 250P は、時代制約性ということを超えた、スターリンの差別主義的人格をも示しています）。そもそも、ソヴィエトでは各民族が民族を代表して意見を述べていくということがあったようなのですが、ソヴィエトから党の独裁へ転化する過程で民族差別がとらえられなかったことが、まさに革命的発展の桎梏となっていったともとらえられます。

誤解のないように書き置きますが、レーニンとローザの論争でローザが正しかったと言っているわけではありません。ローザはユダヤ人で、植民地支配にさらされたポーランドの生まれで、女性で、そして「障害者」でした。まさにいろんな被差別の課題を抱えていたのに、むしろ国際主義的な連帯の中で、自らの個別被差別の問題での突き出しをほとんどなしていません。ですが、その著書『資本蓄積論』の継続的本源的蓄積論が、まさに資本主義の中で差別がどのようなこととしてあるのかをとらえ返しているのとらえられます。ですから、その理論は従属論や世界システム論や反自由主義的グローバリゼーションの理論の中でいかされ、そこから反差別論の形成に大きな意味を持ちえています。わたし自身もそこから、反差別共産主義論を形成しようとしています。これについても、いくつか書き始めつつ、論攷を進め深めていきます。

さて、もうひとつは、ロシアの農民のとらえ方です。レーニンはそしてトロツキーも、農民を土地所有というところでプチブル規定をしています。このあたり、著者も全く書いていないのですが、マルクスのロシアのナロードニキのザスーリッチにあてたロシアのミールに対する評価ということが全く押さえられていないことは、どうなっているのかという思いをわたしは抱きました。ロシアの農民は二月革命以降、一揆的なのですが、打ちこわしや土地の分配などを進めていました。「土地はみんなのものだ」というスローガンも出ていました。その運動は単にプチブルの領域だと、納めることはできないとも言い得ます。これは、ミールーロシアの農村共同体の歴史があったからゆえだと思うのですが、後期マルクスが一義的發展法則から抜け出してアジア的生産様式などをとらえ返していくこととしてロシアのミールについても論及していたことが抜け落ちているのです。これは前述した民族問題から差別の問題の総体的とらえかえしの問題ともリンクしていきます。このあたり、今日からとらえ返すと、農本主義的などころのおさえともリンクしていきます。このあたり、農業に留目していたブハーリンのとらえ返しの問題にもつながっています。ブハーリンは、レーニンの『帝国主義論』とか『国家と革命』にも影響を与えたというようなことを、この本ではないのですがインターネットでの検索で読んでいました。ブハーリンの本にも手を出したいのですが、とてもそこまではやりきれないとも思っています。

今後の課題的なことを含めて、この本で論点となっている、なってくることを、いくつかメモ的に残しておきます

この本では『国家と革命』をアナキズムとしてとらえているのですが、わたしはむしろ、レーニンマルクス／エンゲルスの『ドイツ・イデオロギー』を読んでいないで、「国家は共同幻想である」という規定が、『国家と革命』にはない、むしろアナキズムというより、暴力主義的権力論という批判になります。わたしはマルクスの流れの本を最初に読んだのは、この『国家と革命』でした。『帝国主義論』を読んだところで、スターリン批判から出てきた三浦つとむさんの『レーニンから疑え』という本を読んだところで、レーニン主義の核心的な運動論—組織論的な本はインテリゲンチヤ的な外部注入論批判を抱いて捨て置きました。それでも民族問題に関する本は反差別論に必要なので読んだのですが。これまでの社会運動の解体的状況の核としてのレーニン主義の総括の必要性から、第二次レーニン学習に踏み込んでいました。歴史学習とそこから波及するマルクス派の古典学習としてトロツキー、ローザを押さえて、改めてレーニンの哲学的論攷と『国家と革命』『帝国主義論』の読み直しを第三次学習としてしたいと思っています。

さて、この本を読んでいてそもそもソヴィエト独裁ということは何だったのかという問題が出てきます。そもそも独裁というイメージは民主主義の否定というようなニュアンスがあるのですが、このプロレタリアート独裁の概念はマルクス発なのですが、時の支配階級がどのような階級なのかというところで、時代的にはその階級の独裁という形にならざるをえないというイメージです。資本主義の社会はブルジョアジーの独裁であるというところで押さえていることです。そして、そもそもプロレタリアートの独裁において、ブルジョアジーがいなくなるのですから、いなくなったらプロレタリアート自体もいなくなり、その独裁も消えることです、という論理なのですが、そもそもわたしはロシア革命において、プロ独から社会主義への移行にはならなかったと書いていたのですが、そもそもプロレタリアート独裁ということも、実は、「革命的インテリゲンチヤ」の「革命」に収束しています。まさにテクノラート官僚支配で終わり、もちろん国家資本主義でしかなかったという意味では「ブルジョアジー」も消えたわけでもないのです。

さて、官僚主義批判に対して「民主主義者」という批判がスターリン派から加えられます。そもそも中央集権ということ自体が民主主義とアンチノミーなのですが、そもそもエンゲルスの「民主主義とは支配の形態である」というテーゼがありました。議会制民主主義が民意をごまかしていく事に使われていくことにも現代日本の政治の中に表れていることがあります。民主主義一般に関しても、脳死臓器移植や延命処置の拒否とか安楽死とかで、その中にある優生思想的なところをとらえて、「自己決定はまやかしである」という論攷も出てきています。そこには哲学的な近代的個我の論理の批判、近代知の論理の批判があります。それでも、他者に自己の意志を強制するということや、上下関係が生じるという差別関係を否定するという意味での対等な関係をめざすことは必要です。まさにそのようなこととして、スターリンのロシアの党の官僚的支配体制を批判することも出てきます。それをなんというか、とりあえず、個々の意志を尊重するという意味での「民主主義」や「自己決定の尊重」は必要なのだと思います。先のまやかしという批判をきちんと押さえつ

つです。

ソヴィエト連邦の崩壊は一国社会主義路線の敗北として総括することですが、スターリン主義は批判されていますが、各国共産党・社会主義を名乗る政党においてはその総括をきちんとしなしていないで、内容的に精算されていないようです。それは国家主義者のナショナリズムの扇動にまきこまれ、きちんと批判し得ないという構図や、組織論的に中央集権制、それは民主集中制とかいうごまかしのことばとともに生き残り、また分派の禁止とか、「細胞」も地域と職場にしか認めない、反差別の個別戦線を作り得ない、差別のちゃんとした対象化さえしなしていないという問題があります。このあたりは、スターリン主義の総括にとどまらないレーニンにまで遡った総括が必要になっているのだと思います。

切り抜きメモ的なことを書きかけていたのですが、これもここには載せず異文として保管することにします。

映像鑑賞メモ

たわしの映像鑑賞メモ 030

・藤井道人監督「新聞記者」2019

これは現実に進んでいる情報隠蔽・操作をテーマにして、新聞記者が闇を暴く作業をしていく内に知り合った官僚とりわけ内閣調査室の職員とのやりとりのフィクションです。フィクションなのですが、現実にあったレイプ事件を官邸サイドに近いところからの圧力でもみ消した事件とかも映像の中にとりこんでいますし、ふたりの主人公のひとりの新聞記者がスクープしようとする内容が、首相のお友達の大学の優先認可事件とか、それを巡る官僚の自死とかの重なりを想起させる事が多々。そして、対談シーンとしてバックグラウンド的に流されているのが、菅官房長官に記者会見でくいさがる質問を続けて有名になっている東京新聞記者の望月さんと元文部科学省事務次官で官邸の意向に従わず辞めさせられた前川喜平さん他の対談も出ています。で、アベ政治の「もり・かけ」とか、現実とリンクしていきます。しかし、どこまで事実関係にリンクしているのか分かりません。特に闇中の闇の内調に関する事は。しかし、確実に今の官僚の官邸に付度していく状況・構造とリンクした映画になっています。

さて、この国の闇としてどのようなことが進んでいるのかと言うことで、付度や情報隠蔽・歪曲、文書改ざんがなぜなされていくのか、この映画の中で、主人公のひとりである外務省から出向している内調の官僚が先輩に「昔、わたしたちは国民に奉仕するものだと教わった」と話しているのに、その先輩が自嘲的に、返答をさけて、その後その先輩が自死するということがあります。また、その内調の職員が、上司から「民主主義はかたちだけでいいんだ」と言われるシーンもあります。

これは、SNSのFBで「良かった」という感想が載っていたので、観に行ったのですが、一定のスクープはなされたけれど、むしろ闇に押しつぶされていくようなところで、内部告発する、しようとする官僚が権力からいかにおさえこまれていくのか、ということで終

わっています。スクープで内閣が倒れたというところにはいかないのです。むしろ、そのあたりで終わったからこそ、現実味のある映画になっただろうし、社会運動をしているひとたちには活動していくエネルギーを得るのでしょうか。たぶん、そういうストーリーにしないと、権力側から圧力がかかったかもしれません。

たわしの映像鑑賞メモ 031

・NHKBS1「ユージン・スミスの戦争」2019.8.6 0:45-1:35

ユージン・スミスは「水俣」で有名になったひとですが、若き日に第二次世界大戦の太平洋戦争に戦場カメラマンとして活躍し、戦場の悲惨さを訴えた写真を撮っていたのです。最初は、死んでいった兵士や民間人の犠牲者の写真を撮っていたのですが、米軍の検閲で写真がとりあげられないこともあって、戦争下の捕虜になった民間人の写真をとっていたのですが、米軍の検閲で、過酷な状況の写真が没になっていく、軍の検閲の批判のようなこともこのドキュメンタリーで取り上げています。で、沖縄であるひとりの兵士をクローズアップした同行写真を撮っている中で負傷し、本国に送還されます。

これは実は、再放送だと思います。SNS で沖縄の反基地の映像を撮り続けている三上智恵監督がこの映画の中でインタビュアーとして声だけ出演していることで、この映像の紹介をしていたので、以前観ていたのです。戦争の悲惨さや検閲の問題などの批判とともに、映像作家の人生がどのように変遷していくのか、というところでも興味深いドキュメンタリーです。

たわしの映像鑑賞メモ 032

・NHKBS1「今また”マンザナー”を繰り返すのか？」2019.8.6 1:35-2:24

マンザナーとは第二次世界大戦中に米・日系人の強制収容所があったところです。今、アメリカはトランプ政権下で移民排斥、人種差別を煽る発言を繰り返しています。そういう中で、それに合わせたような銃乱射殺人事件が起きています。アメリカはレーガン政権下、1988年に強制収容に対する謝罪と補償をしました。それなのに、またトランプ政権はという批判の意味をこめた番組です。

謝罪を生み出すために動いた日系人のジョージ・タケイさんの存在を紹介しながら、収容所生活の過酷さの話、忠誠再登録という国家主義的抑圧とかの批判を織り込んでいます。「マンザナー」を語り継ぐ活動をしている日系三世の紹介もしています。「日本人」という範疇でいくと被害の問題なのですが、戦争と差別の悲劇を語る中から、日本もあらためて、加害の問題としてきちんと謝罪と反省を継続していく、語りついでいく必要があるのだと改めて思いました。

SNS の投稿から

2019.8.13 謝罪と反省

「謝罪と反省」ということを言ってきたひとが、「いつまで続けるのか」とか「甘えている」とか言い出すことは、今までの「謝罪と反省」をリセットすることだということは、人間関係の基本的常識なのだと思うのですが。

そもそも〇〇談話とか、声明とかで、反省のようなことを口にしているのに、政権与党サイドから、それをリセットする発言が繰り返されてきた歴史を一体どうとらえられるのでしょうか？

2019.8.15 侵略と植民地支配という認識

韓国は植民地支配と押さえ、日本の首相周辺の政治家は「植民地支配」ということばを避けて「日韓併合」ということばを使うのです。これ自身が「植民地支配」の謝罪と反省がないという批判になっているのです。かつて、国会における質疑の中で、侵略の定義を問われたとき、「侵略の定義はいろいろある」と答弁し、果ては「侵略の定義は歴史学者に任せる」と言った政治家がいました。これらのことは外交問題で政治家としてのイロハの基礎知識の問題です。それもないひとが、首相をやっているという日本の悲劇です。

「日韓併合時代に韓国も恩恵を受けた」という日本の政治家がいます。その論理で言うと、なぜ、戦後植民地支配されている国で、独立運動がおきたのでしょうか？ 植民地支配ということが何なのか、そんなことも分からない政治家集団だから、「日本はアメリカの州にしてもらった方がいい」とかいう発言してくるとんでもない政治家がでてくるのです。日米安保条約の中のとんでもない主権侵害の地位協定をそのままにしていることも、まさにそこから来ているのです。

韓国は外交の信頼関係を壊したということで、日本政府は意味不明の行動に出ました。それを言うなら、今、最大に次から次に外交の信頼関係を壊し、二国間のみならず、世界を震撼ならしめているトランプ大統領に、お友達だと自慢する首相は、なぜ提言(批判)もちゃんとせず、のみならずノーベル平和賞に推薦することなどできたのでしょうか？

(編集後記)

- ◆月刊発刊で落ち着いてきました。しばらく続けます。
- ◆今回の巻頭言、これからの学習の課題になっている最新医療の話につながること。以前から原稿を暖めていたフェミニズムと「障害者運動」の対立の問題。以前書いた原稿を後ろにつけて仕上げました。ずっと書きかけの原稿も抱えています。少しずつアップしていきます。
- ◆巻頭言とつなげて、「社会変革への途」を書きかけていたのですが、急いで仕上げても、

論考が深められないので、次回に回しました。したがって「社会変革への途」は今回はお休みです。

◆「読書メモ」は、歴史学習の続き、これも実は、「社会変革への途」にリンクしている学習です。運動の総括の必要ということでの、その基礎作業としての、過去の世界的運動の総括を、担おうということでの学習。いつになったら、実際の論攷に入れるかは、まだまだなのですが、焦らず進めます。複線的学習も復活させる予定。次々回からになります。

◆映像鑑賞メモは、評判になっていた、久しぶりに観に行った映画「新聞記者」とテレビのドキュメンタリー映像です。後者は、次の項目、戦争と植民地支配の反省ともつながる、過去の歴史を語り継いでいくことともつながっていきます

◆「情況への提言」というシリーズがあったのですが、今、ちょっと賭けていません。で、最近SNSにいろいろ短い文を投稿しているので、それを転載しました。それにしても、今の政治家は、植民地支配ということがどういうことなのか、ということ自体が分からないのです。

反障害—反差別研究会

■会の方針

「障害とは何か」というところでの議論の混乱が、「障害者運動」の方向性を見出していく作業を妨げています。イギリス障害学が障害の医学モデルから「社会モデル」への転換をなそうとしました。しかし、もう一段掘り下げた作業をなしえぬまま、医学モデルへの舞い戻りという事態が起きているようです。また、各国で差別禁止法とか「解消法」が作られています。そこでのモデルは結局医学モデルでしかない状態です。この会でやろうとしている議論・研究は、障害問題を解決していくための「障害者運動」のための理論形成のためにあります。会としては「社会モデル」から更に、関係モデルへの転換を提起しています。実は、日本の「障害者」の間では、既にこの議論を先取りするような議論もなされてきました。そのことが整理されないままになっています。改めてそれらのこともとらえ返しなが、議論をすすめて行きたいとも思っています。また、障害と差別はかなり重なる概念です。他の反差別運動の中での議論や認識論的議論も織り込みながら、議論を進め理論形成していきます。そして、「差別はなくなる」とか「社会の基本構造は変わらない」という意識が、今のこの社会を覆っていきます。そういう中で、今の社会の枠組みに限定した議論になっていき、そのことが論の深化を妨げる事態も生じています。だから、過去の社会をかえようという運動の総括も必要になっています。そのことにも、差別ということをキー概念としなが議論していきたいと考えていきます。

■連絡・アクセス先

E メール hiro3.ads@ac.auone-net.jp (三村洋明)

反障害—反差別研究会 HP アドレス <http://www.taica.info/>

「反障害通信」一覧 <http://www.taica.info/kh.html>

反差別資料室 C <https://hiro3ads6.wixsite.com/adsshr-3>

ブログ「対話を求めて」 <http://hiroads.seesaa.net/>